

# シニアがシニアの立場に立った パソコン指導と仲間づくり

一九九八年、「実年教養セミナー」(三島市主催)でパソコン研修コースを受講した人たちが中心となって立ち上げた「花咲ネットの会」は、二〇〇二年、会員相互の地道な活動と研鑽が実って、NPO法人の認証を受けた。

パソコンを活動の一つの手段として、自分たちの世界を楽しく広げる「花咲ネットの会」理事長の大庭康作さんと副理事長の大房等さんに話を聞いた。



大庭 康作さん



大房 等さん

## NPO法人の 認証を受けたばかり

「三島市民生涯学習センター」を拠点とした活動の基本は、生涯学習の一環として自己研鑽に励み、蓄積した知恵と行動力でボランティアなど地域社会の活性化に役立つこと。またパソコンの技術をさらに向上させホームページの更新、メールリテラシーの活用。出前講座や親睦会なども。

二〇〇二年にNPO法人認証。雇用の創出やボランティア活動、地域への貢献など、社会的使命感を持って、会員一人ひとりの生きがいづくりをめざしている。会員との相互連絡もメールを使っている。ペーパーレスだ。

## 世代を超えて楽しむ生活!

定年まで勤め上げた会社人間が、いざ肩書きを失って社会に放り出されると「自分の居場所」が見つからない。「会」に

所属したことで地域社会の中に「自分の居場所」を見つけて安心する。また、「会」の中の活動を通して、自分が役に立っていることを実感でき、生きがいにもつながっている。

大庭康作さんは、二〇〇〇年、六十五歳で会社をリタイアし、市中のパソコン教室に通った。その後、「花咲ネットの会」に入ってパソコンの楽しみ方を学んだ。今や孫とのメール交換、デジタルカメラでの写真の取り込み、年賀状づくり、さらには旅行・ホテルの予約、手に入りにくい書籍の購入などにも活用し、大いにパソコン生活を楽しんでいる。

腰痛で苦しむ妻のためインターネットを検索し、「腰痛の広場」のホームページで同じ症状や悩みを持つ仲間がいることを知り、情報を選択して適切な対応もできた。覚えたこともすぐ忘れるので、忘れないうちにすぐ実践するという。

「手紙だと改まりすぎるし、電話で言うほどのことでもないと思うことがある。それがメールだと伝えやすい。そのうえメールに写真が添えられるとなお



パソコン教室で真剣に取り組む会員たち

いい。孫との交流にしても、以前は係を捕まえちゃ、昔はこうだった、ああだったと言つて嫌われていたんだが…。今はメールで楽しくやりとりしている」

さらに、「パソコンを教えたり、メールを交換することで世代を超えた良い人間関係や交流が生まれる」と、いかにもうれしそう。妻も入会している。

大房等さんは、六十五歳になつてから苦手なことにも挑戦しようと、六年間、市中のパソコンスクールに通つた。講師は二十代の若者。「今どきの若者は…」という自分の中にあつた固定観念が、若者との交流で尊敬の念に変わり、人生観を覆す大きな発見となつた。

それ以降は年齢、経験、肩書き、男女の別なく、自分以外の人はみな先生と思つて接しているという大房さん。

## シニアがシニアの身になって

半世紀以上もそれぞれの人生に誇りを持つて歩いてきた会員たちは、お互いの個性を尊重し、共に能力を発揮しながら総合力アップにつなげている。

会員五十人のうち女性は約二十人。女性会員の多くが孫育て、介護などにかかわりながら参加している。「将来は、会の運営などを自分たちより年の若い人たちに譲つて、人材育成や周辺サポートにまわりたい」と、次代への配慮も忘

れない。

二〇〇二年、NPO法人になつて初めて、交通費にも満たない金額だが会員に活動費を支払うことができた。社会的には雇用の場が見つけにくいシニア世代。「シニアがシニアのために」という原点を忘れず、力をつけた会員の人材活用・雇用創出などもはかつていきたいと話す。

## 学ぶことが生きがいにつながる

楽しむことの一つに「新しいことを覚える」ということがある。それは、「覚えたいことは教え、教えることは学ぶこと」に通じていく。そして、「学んだことが継続的に活用できること」はとても大切なことだ。

学んだことも実践しないと忘れることの多い？シニアが、同じシニアの身になつて教えることができるのも会の特徴。入会以来、教える喜びや楽しみの中から感謝される充実感も得た。将来は、ボランティアとして地域社会の中で活動を広げていけたら…と夢も託す。

パソコンを自分らしく生きる一つの手段として活用し、活動や生活、仲間づくりを楽しむ「花咲ネットの会」の会員たち。年齢をハンディとせず、逆にシニアであることを財産として展開している。がんばれ、シニア世代！



志村 英二さん

吟英堂翻訳工房代表。清水市在住

志村あゆみさん

SOHO@しずおかでパソコンスクール開講。  
吟英堂経理担当。英二さんとの間に6歳(男)、  
3歳(女)の子ども

# 多様化するワークスタイル SOHO。私たちは……

急速に拡大するインターネット。場所や時間の制約なしに、いろいろなことが可能になった。それは夫婦の生き方・働き方に何をもちたらすのだろうか。SOHOという働き方を選んだ志村英二さん・あゆみさん夫妻に話を聞いた。

## 家庭も仕事も大切にしたい

吟英堂翻訳工房では、主に法律文献の英訳をする志村英二さん。仕事場は自宅とSOHO@しずおかだ。以前は東京で特許事務所に勤めていた。

「今のワークスタイルを選んだきっかけは、家庭と仕事の両方を大切にしたいと思ったからです。元々清水市出身なので、こちらに密着した仕事をし、発展させていきたいと考えました」

インターネットは、五年前、取引先とのやり取りのために取り入れた。当初は補助的ツールに過ぎなかったが、現在は九割以上がEメールによる受発注。調べ物も半分くらいがネットによる検索である。

「SOHOの良さは、時間と空間の制約がない、ということですね。必ず会社に行く必要がない。自宅に居ながらにして働けるんで、男も家事ができる。私は料理を作るのが好きだし、ひと通り家の中のことはできますよ。それから、

自分で行動を決められるから、保育園にいる子どもが急病、という時もすぐ迎えに行ける。これが会社勤めだとなかなかできない。上司の理解はなかなか難しいでしょう」

自宅では、朝五時頃から仕事を始める。朝食をすませると、子どもを送りながらSOHO@しずおかへ向かう。夕方まで、九時間くらい仕事をする。終わらなければ自宅へ持ち帰る。

## SOHO同士のネットワークを作りたい

「SOHOって基本的に一人。私は英語ですが、韓国語、中国語のできる人間がほかにいて、そういう人たちとチームを組んで仕事することもある。そうやってネットワーク作りをしていきたい。私が今仕事で組む翻訳者たちは、実は全部女性。才能があるのに眠っている人は絶対いる。そういう人たちを掘り起こしていきたいですね。インターネ

ットの登場によって女性は働き易くなったと思いますよ。もちろんこれは男性にとつても同じことが言えますが」

仕事が波に乗り忙しい英二さんだが、子どもと風呂に入る時間は大切にしている。子どもが寝付くまでの間は、本の読み聞かせやお話タイムもとってある。その後は夫婦二人で、時には酒も飲みながらゆったりとした時を過ごす。今の働き方がもたらす、くつろぎの時間だ。

## 質問攻めにあう 活気ある教室

一方、あゆみさんは吟英堂の経理を担当するかたわら、週に一度パソコン教室を開講している。

「金曜日の午前中だけ、SOHO@しずおかで教えています。生徒は、国主催のIT講習会を終えた五十代の女性が中心です」

パソコンは、独身時代会社で使用していた。そのほかは独学で学んで身に付けたが、インターネットとの出会いは、「三年前、姉がタイで出産しました。その赤ちゃんが脳性マヒと診断されて…。姉から連絡をもらい、タイでの治療法が日本でも行われているものかどうかを、インターネットを使って調べました。それがきっかけですね」

あゆみさんの持つ教室は、英二さん曰く「同好会」のよう。とても活気があつて生徒も先生も楽しそうだ。

「それぞれがやりたいものをやる。自由です。年賀状を作ったり、表を作ったり。質問も活発に出てくるので、構える暇なんてない。教える側も進歩してきますよ。外に出て、世代の違う方たちと交流するのは面白いですね。自分が広がるし楽しい」と、笑いながら語る。

## 子どものため、自分のため

あゆみさんは今後の夢の一つとして、生徒たちと学習成果の発表会をやりたいと考える。そして、それ以上にどうしてもかなえない夢がある。

「自閉気味の長男のために活動したいんです。インターネットを使って、軽度障害の子に関する窓口を作りたいですね。今、手に入れられる情報は少なすぎて。同じ悩みを持った人たちの意見交換する場にもしたいですね」

四国生まれのあゆみさんにとって、静岡は見知らぬ土地だった。今や、インターネットを通じ人とのつながりができ、夢の実現をめざし前進中である。英二さんも、あゆみさんが生きがいを見つけて、パワフルに活動するのを温かい眼差しで見守っている。

夫婦共通の趣味は旅行。昨年は沖縄で一週間の休暇を楽しんだ。旅行にもパソコンは携帯していく。

「休日に仕事を持っていくのはつまらない、と思われるかもしれませんが、逆にどこでもできるというのが便利なの



パソコン教室で教えている  
志村あゆみさん

ころ」と英二さんが言えば、あゆみさんもうなずく。

「親が毎日パソコンに触れていると、子どももすんなりとITを受け入れる。『お母さん、今日は何見るの?』って。一緒にNASDA(宇宙開発事業団)の子ども用ページを見たり、アニメサイトを見たり…親子で楽しんでいますよ」

# ホームページに メッセージを込めて

インターネットを利用することで、自分の可能性を大きく広げた人がいます。

園田正世さんは、自分のホームページに、「北極しろくま堂」というネットショップを開き、だっこひもとおんぶひもをインターネット販売しています。

園田さんのネットショップは元気いっぱい、子育て中のお母さんを応援するメッセージがギッシリつまっています。



北極しろくま堂 店主  
園田 正世さん

## 始まりは 一本のだっこひもだった

「ベビースリング」というアメリカ製だっこひもの販売を始めたのは、今から二年前のことです。二人目の子どもを妊娠中、このだっこひもと出会いました。使い心地がすごくよくて、多くのお母さんに教えてあげたいと思いました。静岡では手に入りません。そこで販売を思い立ったのです。

始めの一年は口コミで売っていました。使い方の説明をしたり、育児の悩みを聞いたりしながら、商品を一軒一軒手渡して届けていました。そうするうちに、だっこひもを使った人たちから「このおかげで本当に楽になりました」とか、「助かりました」という感想がたくさん寄せられてきました。私も実際に使っていて良いものだとわかっていたので、もっと多くの人に広めるためにはどうしたらよいかと考え、インターネットでの販売を思いつきました。それまでは、イ

ンターネットといつてもメールくらいしか利用していませんでした。とにかくホームページを立ち上げるために、「ホームページ作成用のソフトを使えるようにしてください」とパソコンスクールに頼みこんで、二日間特訓してもらい、ネットショップの開設にこぎつけました。

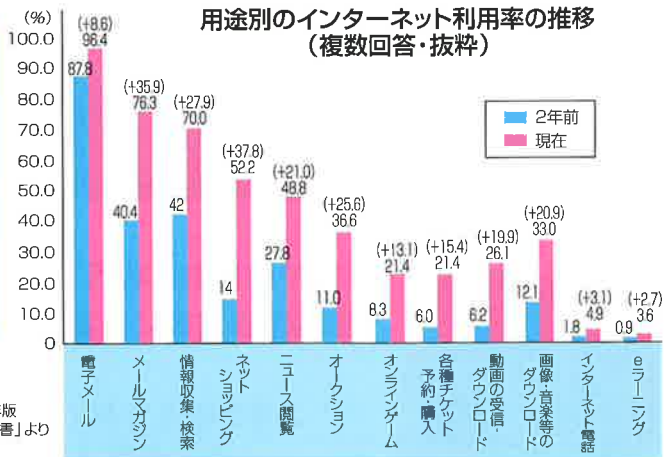
口コミや店でものを販売する場合、何か買いたいとか、話を聞きたいという相手のアプローチがない限り、いろんなことを広めようがありません。不特定多数の人に呼びかけるということは絶対にできません。それに対しインターネットの世界は、不特定多数の人とネット上で出会うことができます。そういう意味で、ネットショップを開いたことで非常に可能性が広がったし、やってよかったと思っています。

## 井戸端会議の感覚で

ホームページを作るとき、最初に決めたことが二つあります。一つは情報をた



ネットショッピングの利用率が著しく伸びている



くさん載せること。その中の一つとして商品があればよいと思いました。もう一つは、すべてを子育て中のお母さんたちの手でやろうということ。私のホームページは母乳や出産に関する内容が多いので、実体験をしたお母さんの視点で作りたいと思いました。イラストや翻訳は専門家に頼んだほうが、効率よくいくのかもしれませんが、時間がかかっても、子育て中の人に頼んでいます。

私自身、初めての育児のときすごく不安でした。情報誌によって書いてあることが違ったり、指導してくれる医療者によってアドバイスが異なったり、分からないことばかりでした。その経験があったので、単にものを売買するだけでなく、育児に関するいろんな正しい情報を皆さんにお知らせしたいと思いました。お母さんが自信を持って育児をし、子どもと向き合えるように。

「今は不安になっていると思うけれど、大丈夫だよ」ということを知らせてあげたいので、井戸端会議みたいな感覚でやっています。

よくお客様に、「北極しろくま堂のホームページを見て、肩の力が抜けて育児が楽になりました」と言われます。同じ母親として、会ったこともない人と共感することができる、そのことがすごくうれし、やっていてよかったなって思う瞬間ですね。

自分自身が販売だけに埋没していると、ほかのお母さんたちと母親として共

## 世界にはばたく

有するものがほとんどなくなってしまう。私の場合は、かんがるーぐみ(お産と母乳育児のサークル)やシーズリサーチ(女性グループ)などの活動を通して、自分自身を広げていかないと、ホームページの内容も深くなっていかないと思うのです。インターネット販売は、時間的にも肉体的にもお店に拘束されないうですむので、様々な活動に参加したり、情報収集ができるのだと思います。

一年前からおんぶひもの販売も始めました。ネットでおお客様の声を聞き、改



「ベビースリング」の使い方を見せる園田さん

良を重ねました。昨年十一月には、フィンランドからメールで注文が入り、おんぶひもを送りました。単に商品を送ったというより、「おんぶ」という日本の育児文化の発信と、子どもを背負いながら家事ができるし、「子どもを我慢させ泣かせておくことないよ」というメッセージを送ったつもりです。

また十二月には、日本人の体型や気候にあっただっこひもを作りたいと思い、アメリカのメーカーとライセンス契約を結ぶため渡米しました。育児中の親が不便なことやつらいことを解決する手助けになれば、という思いでホームページを運営しています。